

科学する大名・旗本たち



7

安藤由紀子

江戸時代の大名や旗本の科学へのかかわり方は二つあり、自分でコツコツ楽しむ人と、フィールドワークが必要な分野では、白山な知識人にそれをやらせて楽しむ人がいた。知識人の方もそれぞれ自己実現したと言える。

【御用】

雪の結晶を記録した古河藩主土井利位、世界地理の権威で「泰西図説」を著した福知山藩主朽木昌綱、参勤交代のかごの中でも和算を解いたという久留米藩主有馬頼徳などが前者の例。

後者の例としての博物学大名は伊能図の仕掛け人で若年奇、堀田長津守正教をはじめ、薩摩の島津重豪、熊本^{（熊本藩）}の細川重賢など数え上げれば切りがない。彼らも強力なネットワークを持ち情報の交換に余念がなかった。

寛政から文化・文政期をピークに博物学の大流行があり、大勢の好奇心あふれる大名や旗本の集団が維新後の急激な西洋文化移入の土壌作りをしていた。

伊能忠敬は何人かの大名に呼ばれて、測器の説明をしている。しかし、測量を見に来た領主は彼の測量日記には記されていない。忠敬は、ただ黙々と測っていたのらう。

蜂須賀阿波守治昭(注1)は伊能測量に強い関心を持っていたらしい。

享和元年(一八〇一年)、実際の阿波測量の七年前、江戸へ向かう参勤交代の阿波公の行列は川崎

好奇心あふれる集団が 西洋文化移入土壌作り

宿で伊能測量隊とすれ違い、おかげで測量隊は別に宿をとらされた。

【御用】

阿波公は学問を奨励する人であ

伊能忠敬記念館には象限儀(手前)など多くの計測機器が展示されている



在中、一行は関の案内で阿波公の蔵屋敷に招待されている。

【御用】

阿波に入ってから、関以下足軽たちが通して付き添い、藩公からの下され物も多かった。その見返りに阿波公は、今徳島大学にある美しい十枚の伊能図を得て、大切に保存し、我々に残してくれたことになる。

五年後、天文方高橋守保(注2)の長崎測量中の忠敬あての書簡に次のような一文があり、読む人を楽しくさせる。

「長崎とその付近は、(探索方の)御小人付の類い多く入り込んでいゝるぞで、諸事お恨みください。……阿波公家より『測量隊はまた当地へお出でになるのですか。今どちらにおいでですか』と質問あり。それから二、三日たつて御小人付から『伊能一統は今どの辺にいるか。書面で承りたい』と言つてきました。察すると、あなたの名を騙つて四国辺御御の者ども(無銭飲食)があるようです。お恨み第一に、とかくなんでも内輪に行動してください」

これで阿波藩が伊能測量隊一行をどんなに大切にしたかが分かるし、一行に悪乗りした不届き者の存在まで伝えてくれる。

ったから、測量隊の持っている見慣れない道具に目を引かれたらしく、伊豆地方を測っていったん帰府した忠敬に、高橋守保の紹介状を持たせた関権次郎という藩士を遣わし、藩公が見たいと仰せなの

で、と測器を借り受けさせている。関は三月後また至時の添え状を持って、今度は大阪の間重富方んに現れ、弟子にしてくれと頼んだ。

ただし、「怠け者で、蜂須賀家の大阪屋敷の留守役からも、よろしく頼むと言われていたのです。が、これではどうにもなりません」と、至時あての重富書簡にある。四年後、第五次測量で大阪滞

(注1) 阿波徳島藩12代藩主。20万石余 (注2) 1785-1829。至時死後、その後を継いだ長男